水月

吉野水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水月

【Ｎコード】
Ｎ５４３４Ｕ

【作者名】
吉野水月

【あらすじ】
倒産したゲーム会社で青笹は奇妙な気分にとらわれる。
短編幻想小説

現（うつつ）

青笹は眼をこすりながら窓を開けた。隣の飴屋の煙突が視界を遮るようにそびえたつ。飴屋は古い木造の建築で、重い瓦で屋根が葺かれている。その重厚な印象はさすがに操業百数十年の老舗の貫禄を持っていた。窓を開けたことによって蒸した不愉快な熱気が部屋の中に流れ込んでくる。

一つ大きな欠伸をして目をこする。頭の中がやや重く感じられた。こんなに寝たのは久しぶりだった。

下町にある雑居ビルの四階、千里眼という小さなゲーム会社の事務所が青笹の今いる空間だった。だが、会社は昨日の十七時二十分をもって倒産していた。青笹は雑然とした室内を見回す。何台ものパソコンにタコ足配線されたコードが木の根のようにのたうち、床をはい回っている。雑誌やＣＤＲＯＭ、プリントアウトされた書類がいたる所に山を作っていた。ちょっと見た所、どれがゴミか判別できない程、散らかった職場だった。それでも今日中に私物をまとめ、掃除をしなければならない。

足下にはビールの缶やポテトチップスの袋、飲みかけの酒瓶が乱雑に散らかっている。昨日倒産が決定した後、残っていた社員十数人で行った送別会の成れの果てだった。その場にいた全員が送別会を行うことに賛成した。特別に会社に思い入れがあったわけではないが、何故か飲み屋に行こうという提案は出ず、会社で飲むことになった。話は自ずから今後の身の振り方に移っていた。

誰もが青笹と同じ不安の中、酒宴が続いた。誰かが一頻り自分たちの境遇を嘆いてラジカセを持ち出した。ポップスやアニメの主題

歌、演歌から軍歌まで合唱して宴は終わった。大体の社員は帰ったが、酔い潰れた青笹はこの場で寝ていた。

顔を洗おうと青笹は洗面所に向かう。洗面所は、仕事場の様子とは対照的に妙に片づいていた。やや退色した社のポスターが壁に貼ってあるのが目に入る。古代エジプト風の眼のデザインが黒字に白でペイントされたのが千里眼のシンボルマークだった。未来を見通すという気概で作られたらしいが、実際は未来を見通す所では無く倒産してしまった。

呆気無い話だ。

青笹は奇妙に拍子抜けした気分で、蛇口をひねる。ぬるい水の感触が青笹の顔の皮膚を撫でた。目に水が入ったため一瞬、視界がぼやけ、ものの形が輪郭を失う。タオルで顔を拭う。鏡を見るとやつれた自分の顔が目に映る。

今日あたり、アパートに帰れるだろうか。

そんな思いが、頭をかすめる。青笹はここ数日、ゲームソフト開発の追い込み作業が佳境に入り、自分のアパートに全く帰っていなかった。

青笹は眠気を振り払うように頭を振り、洗面所から出て、キッチンに入る。だがキッチンと言っても湯を沸かしたり電子レンジがある程度の場所だった。まだ食べていないカップラーメンの箱やインスタントコーヒー、未使用の洗剤や石鹸などが転がっている。こういった泊まり込み組が使用した生活雑貨は一応公共財として扱われ、はっきりした所有者は存在しなかった。青笹の頭に、後で貰うのも悪くないという考えがわき起こる。

その時、足下でもそもそと何かが動いた。会社でゲームの効果音やＢＧＭを作っていた上郷武志のシュラフだった。上郷も酔い潰れたらしい。上郷はなぜか蛍光緑色の登山用シュラフを愛用していて、泊まり込み作業の時はいつもこれにくるまっていた。そんな上郷の様子はまるで怪獣映画のモスラを思わせた。

「おう」

「よう。今何時？」

シュラフから這いだしながら、上郷は時間を聞いてきた。青笹は腕時計を見ようとして持っていないことに気が付き、戻って卓上の安っぽいプラスチック製の時計を見た。誰かがクレーンゲームで引き当てた代物ですぐ止まり、まるで役に立たない。

「九時三十分位」

「昼飯には早いな。今日は俺達だけか」

「くじで俺達が後かたづけに回されたんだよ。憶えてないか」

「ああ、そういやそうだな。何しろ酔ってたから、あんまし覚えてねえ。何か下の歯医者が怒鳴り込んできたような……」

よっという掛け声と共に上郷は立ち上がった。背は随分と高い。無精髭と色黒な所からゴボウを連想させる。髪は短めに刈り込んであった。上郷は子供の頃から、バイオリン奏者を目指していた。シンセサイザーやコンピューターを駆使して作るゲーム音楽とは、大分かけはなれた方面だがその当たりは大学の時に覚えたという。な

ぜバイオリン奏者を目指すのを辞めたのかは上郷と特に親しい青笹でも知らない。

青笹はインスタントコーヒーを二つ入れると自分の席に座った。やや粉っぽいコーヒーの香りが、脳を刺激する。もう自分の席も何もないのだが、取りあえず自分の席以外に座る気はしない。

「さて、敗戦処理だ」

「ああ」

上郷の皮肉っぽい声を聞きながら、がらんとした事務所を見回した。終幕の後の舞台裏。空っぽのサーカス。一週間前の今頃は追い込み作業中ので、火事場か戦場のような騒がしさだった。それがまるで嘘の様な静寂に包まれている。手始めにまず、自分の置きっぱなしの私物を回収し、黒のスポーツバッグに詰める。積み重なった書類の束を除けて、丸めた紙をゴミ箱に入れた。急に音楽が流れ出す。バッヘルベルのカノンだった。上郷が好きな曲で始終ＣＤプレイヤーに掛けているため、青笹も覚えてしまっていた。青笹にはその明るい寂しさを伴った旋律を今の状況に似つかわしく思えた。

「えらいことになったよな」

窓を開け放つ音った上郷の声が大きく聞こえた。

青笹はカップラーメンの塩辛いつゆを一口飲む。後は捨ててしまうつもりだった。塩分の取りすぎは身体に悪い。まだまだ残務処理にはケリがつきそうになかった。

ふと、完成した二枚余りの試作ＣＤＲＯＭが無造作に積み重ねら

れているのが目につく。まだ何の包装もされていないため、貝殻の裏の色を思わせる七色の光沢を放っている。今年の夏、目玉として発売されるはずだったパソコン用の「シャトランジ」というファンタジー風の戦略シュミレーションゲームの試作品だった。原案だけで終わったり、中途で放棄される作品は千里眼のような小さな会社でも山程ある。だが「シャトランジ」は完成しながらも世に送り出されることはない。しかも昨日まではこの世の光を浴びるため、今や遅しと待っていた。死蔵される夢。胎児の化石。ついに出撃することのないまま朽ち果てる戦列艦。

誰にも評価されず埋もれていくためだけのゲーム。ひどい評価を受けるだけのゲームの方がまだましだ。

青笹の視線を追い、上郷も机の上に視線を注いだ。

「シャトランジか。惜しかったな、これは。お前の手がけた奴だろ」

「ああ、キャラデザも結構良かったから行けると思ったんだけどな。残念だった」

「それだけか？」

「どういう意味だ？」

「いや、お前のことだからもっと騒ぐと思ったんだ。妙にあっさりしてるな」

「ああ……仕方ないさ」

青笹は気のない返事をした。確かに上郷の言うとおりだった。青

笹は一番妥協を許さない性分だった。一見おとなしそうな外見のため、青笹に相対する人はさも意外な抵抗にぶつかったような印象を受ける。青笹にも自覚はあった。頑なな部分が根のようにかなり深い所に巣くっている。他のプログラマーやグラフィッカー、テストプレイヤーとの衝突を生んだ。そんな青笹の間に入って仲裁していたのがサウンド担当の上郷だった。今思えば、トラブルも多かったがその中で何とか妥協点を見出しやってきた。

大量の書類やＣＤＲＯＭをどかし始めた。ここまで乱雑な事務所も珍しいのではないだろうか。古雑誌や漫画本の山をどかそうとしたら、しみのついた企画書やらデモテープの山が崩れてきた。青笹は、おおよそ整理をつけた後、一番奥の棚に向かった。学校の職員室にあるようなかなり大型のものだ。ここが一番ひどく乱雑に放置されている箇所だった。雑誌やら本、ＣＤ、忘れ物の傘、Ｔシャツというような各人の私物が山を築いている。

身体が疲れているということもあったが、意識が水に浮いているような奇妙な感覚だった。

誰の物とも知れない灰色のレインコートをどかし、資料用のえらく重く、分厚い戦闘機の写真集を引っぱり出す。これはかなり高いらしい。写真集をどけた後には、妙にきれいな皺のよってないＡ４サイズの封筒があった。青笹は興味を覚え開封する。中には、きれいにまとめられた漫画のカラー原稿が入っていた。今時珍しく手書きだった。水彩のような淡い色彩で描かれた作品で、今まで見たことの無い独特のタッチの絵柄が奇妙な存在感を示している。海に沈んだ街で奇怪な魚を取る漁師の話だった。人も魚も船も幻想的なデザインでまとめられている。

多分、会社の人間が描いたものではないだろう。どこからか手に

入れたものなのかもしれない。会社にはイラストや漫画方面の人脈を持っている人間は多数いる。青笹はその作品を元通りに封筒に納め、自分の私物が置いてある場所に重ねて置いた。ゴミとして捨ててしまうのは惜しすぎる出来映えだった。

青笹は喉の乾きを覚え、冷蔵庫に向かった。

冷蔵庫はかなりの旧式だった。今のタイプのように容量はなく、丸みを強調したデザインで、冷蔵室と冷凍室と一体化されいつも上の方は凍てついている。だが、非常に冷却力が強いので夏場は重宝していた。この冷蔵庫は、先住者が置いていったものだった。どんな人間が使っていたのだろうか。どうでも良いことだが気になった。冷蔵庫の中を見ると昨日の宴会で飲まれなかった日本酒とウィスキーのボトル、ウーロン茶が置いてあった。青笹はウーロン茶のペットボトルを持ってきて、自分と上郷のマグカップに注いだ。ちょうど二人分の分量だった。

「暑いな」

「クーラーも壊れたみたいだからな。冷蔵庫もそうだが、よくもまあ、骨董品ばかり使っていたもんだよ」

しばしの沈黙が乱雑な部屋にもたらされた。

部屋を見渡す。まだ、やるべきことが大量にあったので青笹は、かなりの倦怠感に襲われた。一口、ウーロン茶で喉を湿らせてからおもむろに上郷が口を開いた。

「ちょっと俺用事があるからさ。今日は帰るよ」

「おお、お疲れ」

「すまんな。明日は倍片付けるからさ」

「ああ」

じゃあな。上郷が手を振って去る。

青笹も椅子にもたれて、パソコン雑誌を広げた。上郷が出ていってしまったのに自分だけ作業を続行する気にはなれなかった。雑誌を開いたものの、字面を読む気にはなれない。

なぜ、俺はゲーム会社などにいるのだろう。

よく考えればおかしな話だった。青笹はとくに熱狂的なゲームマニアという訳ではなかった。まったくプレイしないわけでもないが、この業界にいる人間としては、あまり触れていない方だった。

自分はゲームが特に好きなのではない。（嫌いでもないが）俺が好きなのは文化祭前なのだ。

青笹は文化祭前が好きだった。愛しているといっても過言ではなかった。中高、大学と文化祭の中心的な人物だった青笹は、白ける人間が多い中、率先して動いた。そんな青笹の様子を見て、何人かの人間がぼちぼち加わり始める。それがパターンとなった。企画や計画、折衝という行動自体も好きだったが、何より青笹が好きなのはその雰囲気だった。せわしなく行き交う生徒達や金槌の音。買い出しや泊まり込みなどという普段の学校生活ではありえない非常事態的な出来事。そして何よりも切羽詰まった時間の中での作業が好きだった。

俺は文化祭前を終わらせたくないがためにここにいるのかもしれないな。あの時、あの時間の中にずっといるために。

ふと眠気が襲ってくる。柔らかい泥に足をとられる様に青笹は、居眠りをはじめた。

現（うつつ）　（後書き）

短編ですが二つ折りにいたします。御容赦。

幻（ゆめ）

色とりどりの旗が風に翻る。

無数の、この世界の全ての人間を掻き集めたかのような無数の敵軍。

青の軍旗を掲げる蒼国の風騎兵。ついこの間までは黒陽朝帝国の藩屏として征戦に協力してきたはずの草原の国が掌を返したように最大兵力を持つ敵となった。

白い軍旗がたなびかせる嶽国の長槍兵。山岳民族の剽悍な国。長らく兵を提供してきたはずの彼らは今や侮り難い精鋭を揃えて進軍してきた。

赤い軍旗を奉ずるのは煉国の砂蜥蜴騎兵。長らく帝国の支配に抵抗してきた執拗な砂漠の民は、ついに訪れた復讐の時に遅れを獲るつもりは無い。

黄の軍旗を振りかざす蛟国の水舟兵。既に大河を遡り帝都港まで辿りついた海賊衆は今や遅しと上陸を待っていた。

茶の軍旗を押し立てる土国の甲機兵。帝国の取るに足らない属国である職工の国、投石器を持ち、坑道掘削に長けた工兵の大集団を繰り出して要塞化された帝都を攻略せんとする。

紫の軍旗を押し戴く鳳教団の僧兵。冥想に耽っていた霧の寺院山から二百年ぶりに黒陽朝滅亡の預言成就のため降りてきた。

緑の旗と共に進む林団の歩兵。国の治安維持を担ってきた民間兵団。遂に黒陽朝は帝国臣民にさえ叛旗を翻されたのだ。

燦然と輝く銀の旗。禁軍の双牙兵。黒陽朝の親衛軍、最後の盾は皮肉にも最悪の凶器となって黒陽朝に止めを刺そうしていた。

空を仰いだ。

黒陽朝帝国の黒い軍旗が風に押されながらはためいている。

太鼓の音が轟く。全身をくまなく装甲した巨大な雷龍がゆっくりと歩みを進める。少し離れたところから、大地を埋め尽くすほどの黒い歩兵の方陣、黒い騎兵の縦列が続く。そして空を覆わんばかりの黒の近衛騎士たちの乗る翼竜。雷龍に引かれた移動要塞の前面には黒き鎧を着た、たけり狂う巨人たちの群。

無数の旗と無数の方陣がじりじりと距離を詰める。様々な色と黒が対峙する。

戦が始まった。

弓兵から空が暗くなるほどの大量の矢が放たれる。そして敵からも同じような、いや倍するほどの矢が放たれた。

鯨波があがる。

一人の近衛騎士は、御座所の主をちらりと盗み見た。先月即位した新皇帝。黒陽朝最後の希望。あまりに頼りないほっそりとした男装の少女は、なんでもないかのように、その青白い顔を将軍や参謀に向け、指示を与える。恐ろしく自信に満ちた態度だった。一瞬、

皇帝と目が合う。だが、皇帝は一瞥もせず、指揮をとり続ける。

誰かに似ている。なぜ、畏くも皇帝陛下を知っているなどと思ってしまったのだろうか。

わだかまりを振り捨てるように、近衛騎士は自分の翼竜へ、ひらりと飛び乗った。いまだ、出陣命令は出されていない控えだった。

勝利か、敗北か。存続か、滅亡か。一つの国の運命はやはり二つに一つしかない。

青笹は物音に居眠りを破られた。かなりの間、居眠りをしていた感覚が残る。部屋の中は妙に薄暗い。

「帰ったのか」

そこまで言って振り向いた青笹の目に移ったのは上郷ではなく、ここでは珍しい女性スタッフである宮守香織だった。彼女は黒髪をショートカットにして、度の厚い眼鏡を掛けている。色白でひどく痩せているため、少年のように見えた。腕など服の上からでも、正に「針金のような」という表現がふさわしい。彼女のセンスか、いつも黒いシャツブラウスとスラックスという服装だった。彼女はかなりの夜型で深夜に千里眼を訪れデザインの仕事をしていた。変わり者という評判だったが独特かつ一般受けも狙える彼女のデザインは定評があり、青笹も評価していた。だが、個人的にはあまり会話をしたことはない。また、宮守の雰囲気は、どことなく、人を近寄り難くさせるに充分だった。そんな宮守は本人が自覚していない所で、妙に他の女性スタッフに人気があった……というより単に面白がられていただけかもしれないが。

「すいません。上郷の奴と間違えて」

「私物を取りにきました。昨日、会社から連絡があって。倒産したそうですね」

宮守の声はか細いが、はっきりした声だった。その上どこか鋭い。

「ええ、まあ、やっかいなことになりました……」

青笹は、そういいながら、立ち上がった。

まだ片づけなければならない後始末はたくさんあった。

その時、バラバラと小石が落ちるような音が窓の外からしはじめた。夕立だった。程なく激しく降り注ぎ、隣の飴屋の瓦屋根に水滴が叩き付けられる音が響きはじめた。

「やあ、土砂降りだな」

青笹は一人事の様に呟くと窓の外を凝視した。昼間だというのに、薄暗い闇に町並みが沈んでいる。飴屋の煙突が、怪物が住まう塔のように黒々と浮かび上がっていた。青笹はいつも吸い付けられるようにして雨を眺める癖があった。聴覚を支配する激しい雨音。視界を横切る雨の白い残像。夜の闇とは違う水の底のような暗さ。そんな雨の降るのを見ているとまるで時間が止まったかのような錯覚に襲われる。世界が止まり、それを見ている自分だけが取り残されている感覚。

「ここはもう、片づけたんですか」

宮守の声で青笹は我にかえった。宮守は何か不思議なものでも見るような顔で青笹を見た。

「どうかしたんですか」

「えっ、あ、いえ、すみません。ぼんやりとしていたもので」

宮守も窓の外に目をやった。

「雨は好きですか。さっきからずっとみていたようですけど」

「別に、好きという分けでは無く、何となく気になるんです」

「そうですか……私は好きです」

宮守はそういうと窓を開き、大きく湿り気を帯びたひどく冷たい空気を吸い込んだ。雨水の匂い。闇の冷たさ。やや長めの宮守の前髪に雨水がかかる。青笹は、決して不快ではなかったが、どういう訳か居たたまれない気分になった。

「悪いが締めて下さい。吹き込んできますから」

宮守は黙って窓を閉めた。

青笹は電気を灯し、再び後片づけをはじめる。ひさびさの雨が降っているせいか、湿気を感じる。青笹は湿気をひどく嫌っていた。自分でも異常と分かる程、嫌悪感を覚えていた。この上蒸し暑ければ、どれほどの倦怠感に取り込まれるだろう。少し寒いのが救いだった。

後始末はかなり早く進んだ。私物をとって帰るだけだろうと思っていた宮守が手伝ったためだった。青笹にとってそれは少し意外だった。不要物を戸口にコンピューター類や書類を壁際にまとめて置いた。雑然とした仕事場が嘘のように片づく。全体の密度が下がったような気がする。今まで見慣れた仕事場でも、ただ、その風景を構成している物体がほんの少し移動しただけで全てが様変わりしているように見えた。棚をどかして初めて見えた壁のひび割れが、ひどく大きく見えた。

青笹は不要と判断した書類や売れそうもない機器の山から、重ねて置いたコンピューター関係やデザイン関係の雑誌を持ち出した。

「ああ、そこら辺の雑誌は持っていって構わないと思いますよ。どうせ、誰もとりにこないでしょう」

宮守は二三冊の雑誌を手にとって眺めている。青笹は喉の乾きを覚えた。今までずっと身体を動かしていたため、汗をかき、喉が乾いている。宮守も同じだろう。

「何か飲みますか」

「ええ」

宮守は雑誌からやや目を離した。青笹はキッチンの冷蔵庫に向かった。冷蔵庫を開ける。ウーロン茶も、ジュース類も切らしていた。あるのはビールと日本酒だけだった。逡巡している青笹が気になったのか、宮守も冷蔵庫の中をのぞき込む。

「酒しかありませんね……昨日、飲み会をしたんですよ。何か買っ

てきますか」

「いいえ、いいです。日本酒下さい」

「いいんですか」

「ええ、こう見えても私、かなり強いんです」

宮守はそう言って、空いている椅子に座った。青笹は、キッチンに行きコップを二つ持ってきて、上郷に言わせると中の上の冷酒を注いだ。急速に内側から冷やされたため、コップが曇る。控え目なアルコールの匂い。昼間から飲むことなど青笹にとっては学生時代の「迎え酒」以来だった。ふと懐かしいような、それでいて後ろめたい気分になる。

「宮守さんは、これからどうするつもりですか」

「特に……決まってません」

「俺もですよ。いつかはこうなるとは思ってましたけど、いざ、潰れたとなると……」

「そうですね。でも、私は仕事が無い方が普通でしたから」

宮守は素っ気ない感じでそう言うと窓の外を眺めた。雨は相変わらず激しく降り注いでいる。アスファルトや屋根が水煙に包まれているかのように霞んでいた。

かなり、早いペースで飲んでいるにも関わらず、まるで酔えない。

宮守はコップを空けた。宮守もまた、本の少し朱がさした程度で、一滴も飲んでいないかのような顔をしていた。青笹は宮守の答えを聞いて、自分が軽率なもの言いをしたのを恥じた。宮守にそんな話をしても仕方がない。単に愚痴っているようにしか見えない。そんな視線は青笹にとってあまり気分のいい物ではなかった。

「やはり、悲しいんですか」

「……？」

意に反して急に発せられた宮守の言葉に青笹は戸惑った。

「会社が潰れたんですから。青笹さんは設立の時から関わっていたんでしょ」

「ええ、まあ」

青笹は、曖昧な返事をした。悲しい。それはそうかもしれない。だが、どちらかと言えば青笹は、静かな苛立ちを覚えていた。自分のやってきたことが、誰の責任であれ中断させられたのだから。理不尽な現実だった。

今まで、そんな怒りを押さえるため、潰れた要因などを考えていたのかもしれない。確かに「シャトランジ」は惜しかった。だが、それ以上では無い。それ以上の感情は沸いてこないのだ。あれ程、心血を注いだ作品なのに、その程度の想いしか持てない。それは青笹にとって意外だった。妙に薄ら寒い思いさえする。

青笹は沈黙を破るように口を開いた。

「シャトランジ……残念でしたね。宮守さんのキャラデザ良かったのに。俺もあれは結構自信があったんですよ」

「ありがとうございます。服装とか武器とか、たくさんの資料を見て考える仕事でしたから勉強にもなりました」

宮守は目を伏せて、手酌で日本酒を注いで飲み干すと立ち上がった。

激しく降っていた雨はようやく小降りになり、雨音も断続的なものになりつつあった。

潮が引いていくように雨音が引く。

「少し退屈ですね」

「は？」

「いえ、雨が止んでしまうと」

青笹は何となくはぐらかされたような気がした。そのまま、数分間急速に衰弱していく雨音が響く。ひどく静かだった。

「そろそろ帰らせて頂きます」

「俺も、ここを閉めて帰ります」

「じゃ、駅まで一緒に帰りましょう」

宮守はそう言ったが、何か心残りがあるような表情をした。

「あの……ところで、封筒を見ませんでいたか。多分わからないと思うんですが、黄色い封筒です」

青笹はすぐに、先程の封筒を思い出し、慌てて自分の私物が置いてある場所から取り出す。

「これですか。さっき、掃除してたら出てきたんです」

「ええ、これです」

宮守は大事そうに、封筒を受け取った。

「これ、宮守さんが描いたんですか。独特な作品ですね。面白かったですよ」

「そう……ですか」

宮守はあからさまに怪訝な顔をした。

「いえ、自分ではあまり良くないと思っていたんです。技術的には自分のやりたいことができました。でも何かが違う。人から求められるようなものではないというだけではなく、それ以外にも、違和感を持ってしまうような部分があって……それで何となく机の中にしまい込んでいました。でも今日、急に思い出して一応、持って帰ろうと……」

「でも、俺は良い作品だと思います。最近こういうの描く人はいないじゃないですか」

「そうですか」

宮守のいつも無表情な顔に、本の少しだけ柔らかな笑みが浮かんだ。

「私……漫画家志望なんです。子供の頃から絵を描くのが好きで、絵を描いている時だけ、その絵の世界と現実の世界が重なっているような気がして。その重なっている部分が自分のいるべき世界のような気がしてならない。それで絵を描いているんです。ずっと」

宮守ははっとしたように口をつぐんだ。

雨音はもう止み、壊れかけたクーラーの音だけが静かに響く。

「つまらないこと話しましたね」

そんな宮守の様子を見て、青笹は何故か羨ましく感じた。

青笹も私物をまとめ、使い古した黒いスポーツバッグに放り込む。青笹は周囲を見回した。見慣れたはずの仕事場がひどくよそよそしく感じた。電気を消し、宮守と共に外に出る。

青笹は五、六秒の間、深い闇を凝視した。もう千里眼はこの世のどこにもない。明日その後始末をする時には、ここは単なるビルの二階の２０３号室なのだ。千里眼の仕事場ではない。自分もまた千里眼のスタッフではない。

当たり前のことが、まるで信じられない出来事のように思える。意外に簡単に生まれ、消えてしまう。それが全ての事象や物なのだ

ろうか。青笹は子供の頃に何年経っても残っていると思っていた神社が次の年の夏に消えてしまったことを思い出した。その時の奇跡でも目撃したような厳かな気持ちを未だに覚えていた。

外に出ると周囲は、もう青黒い闇に包まれていた。雨はすでに止んでいたが、雨の残り香が周囲に漂っている。雨の冷却効果で大分涼しくなっていた。空を見上げると夜の闇とは違う暗さの黒い雲が急速に流れている。ひどく静かな空気の中、二人はゆっくりと歩き出した。この辺りは店じまいが早いらしい。

街頭の水銀灯の淡い光が道案内のように灯る。

時折、青笹を通り過ぎていく夜風が心地よい。

もう終わったのだ。なぜか不安と落胆は無い。それよりも安堵感と幾ばくかの虚ろな気分が胸の中に影を落とす。

二人の足音がひどく大きく響き、昔の小さな打楽器でも叩いているようにアスファルトに反響する。

急に片方の音が止まった。

「あ、月ですね。ほら」

宮守がアスファルトを指さした。先の夕立でできた水溜まりに丸い望月が空にある姿を映していた。水に映る白い月。青笹は空を仰ぐ。空にも白い月が掛かっている。

「今日は満月なんですね」

夜風が吹き渡り、引きちぎられた黒雲が月を隠し、水面が揺れ、水に映る月を揺らす。

その風は青笹にとってやや肌寒く感じられた。青笹は水の中の月に魅入る。

水に映る月も空の月もどちらも月であることには変わらないか……水に映る月は、偽の月だ。だが、どちらも手の届かない物だという点では、所詮同じだ。

また頭蓋の裏が少し熱くなった。なぜか今日は妙な気分になることが多い。

宮守が先に歩き出したのに続き、青笹も歩き出した。駅のあかりが見える。まだ上郷が帰ってきていないことを思い出して苦笑した。

「じゃあ、俺はこの辺りで失礼します」

青笹は、この辺りの駐輪所に自分の自転車を置いてあり、そこから隣町の自分のアパートに帰っていた。もうアパートに帰るのは二週間振りだった。

宮守は軽く会釈すると商店街の方向へ消えていった。多分、この先の駅から電車に乗って帰るのだろう。

湿った空気が流れていくのが、感覚的に分かる。ため息を一つついて青笹はゆっくりと歩みをすすめた。

見慣れている商店街とも住宅地とも何か違う、自分がまるで違う世界に来ているような気がした。ひどく周囲がよそよそしく感じら

れる。

「青笹さん」

急に声を掛けられ立ち止まると先程帰ったはずの宮守が水銀灯の光を背に立っていた。

表情は暗くて分からない。

「あ……どうしたんですか？」

「あの、やっぱりこれ、青笹さんに貰ってもらう方がいいような気がします。押しつけがましいような気がしますけど……よかったらどうぞ」

宮守はやや控えめに封筒を差し出した。

「いや、すいません。いただいてしまって。でもいいんですか、本当に？」

「ええ。これはいいんです。もう」

「もう？」

「自分で確認できたんです。どこが失敗していたか。私はまだ何か作品の底に流れているようなものが無い。見えないものを描ききれていない。面白いものですね。かき上げた後には分からなかったことが時間を置くと分かるようになるなんて」

青笹は宮守の顔を見つめ直した。彼女の分厚いレンズに阻まれた

眼はいつになく生気を帯びていた。

「良かったですね。作品もっとよく読ませて貰いますよ」

「あの……青笹さん」

「え？」

「どこかでお会いしたことがあるような気がしたんですけど……気のせいでしょうか」

言われてみればそのような気がしないでもない。こうして雨上がりの月夜を歩いていると宮守が、まるで古くからの知り合いのように思える。青笹はその感覚に戸惑った。

「すいません、私、変なことを聞きましたね」

「いや、俺もそんな気がしてたんです……本当ですよ」

青笹の言葉に宮守は軽い笑みを浮かべた。

「作品を読んでくれてありがとうございました」

「いえ、こちらこそ。お元気で」

今までろくに口を利いたことが無かったのだが、今日一日が終わってみると宮守がひどく親しい馴染みの友人の様な気がしてならなかった。青笹は違和感を覚えながら宮守から貰った封筒を小脇にしっかりと抱え直した。いささか重みのある紙の感触は、青笹に安心感を与えた。

青笹は、空を仰ぎ見た。空には相変わらず月が白い光を放っている。月は一つだが、この世界にある全ての水面にその影を落とす。月は一つでは無く無数に在るのだ。ふと、そんな考えが浮かぶ。青笹は、また頭蓋の裏が少し熱くなるのを感じた。今夜の月はやけに大きい。

幻（ゆめ）（後書き）

まあ、なんとも言いようのない話ではあります。デジャヴというか、平行世界というか、そんなのが好きなんですな。ずいぶん前に書いたのを引っ張り出してきました。当時は、こんな気がしていた、と考えるものまたいいものです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5434u/

水月

2011年7月7日10時00分発行